

再開高臺梅

二

13
3153
2



3153
2

明屠志水著 考幣餘事 白紙摺明朝編 文房書畫家必用之書也

題 函 詩 剛 全二冊 題 再 詩 集 全壹冊

吳穀先生撰輯

書畫比白宜

鼠格明朝編 懷本全三冊

薄用摺懷中本全帶一冊 或為低劣旅行又提

書家必用の小冊諸君子常備小案上小備置あすを
其摘用奉て綴をから詩題重狀と始して絶句
聯句の云も更あり數字中外を註し辨ふあり
其使するを撰と漏れ載しなく此書と披きそ
其自在と得と云ふことあり實小書と教の君子
必携い掲易の珍寶とも可綴小冊あり

書肆

大阪北久寶寺町心齋橋

前川源七郎梓

再関高臺梅卷之二

沼田郡屋阿部川喧曉の結

栗村身免卯著



目説沼田郡屋阿部川喧曉の結
上陸子城ちけーハ眩ふ新なるうんーん思ひーが一刀に討て
捨波河とやて退るるが屋敷の心甘き日るべして波河
の圃も然のさとし舟をり世不より波府の城まその一里にきさら
ごり不ろまの敷よ入てもろくは内一対面せんそ毎新川へ来
るよおち水さ坊り川越そそは川端よ声と限り
よ岸をまの湖よ川越二人ま出まら此間ハ歩り越そそ
敷川へるるにまろー濱は舟よそ流し進をーとよ新なり

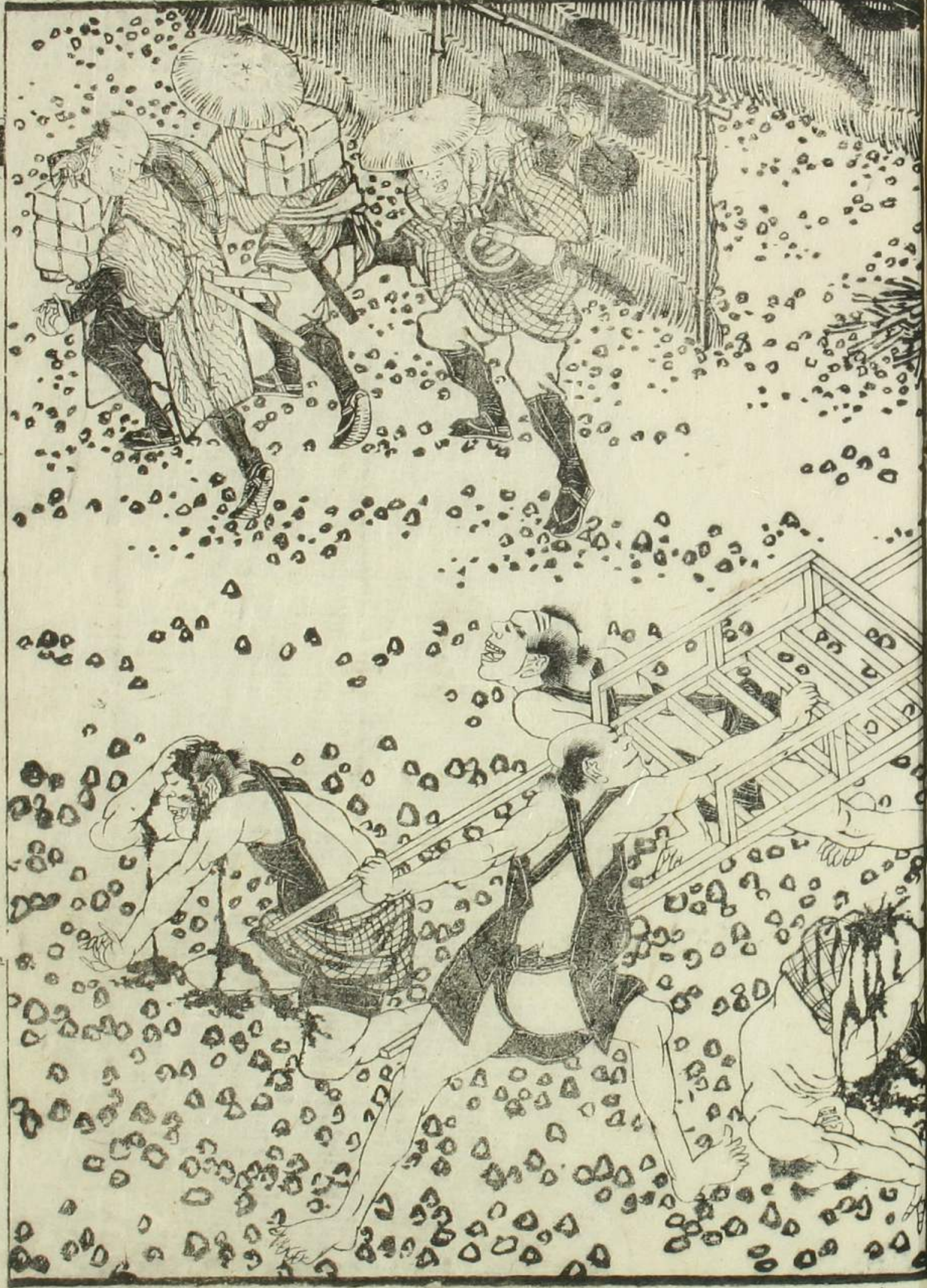
かたがた川権威とてい流きまがだまきよとみかきと打懸き
 案の意をこの川の川越賃の申し分おきかきと先づ流しつれよ
 とつと西人目と見合をききいむゆりし程なく川を流しつれよ
 多人前金取とつきいさきよとつと取戻打多し案の南極
 今川家へ御用いせし紙そのより川越賃の役不介と
 へつとつと二人大い腹とまきうへ流しぬもよつるまのよき
 徳成り又へ川を流して後たやうの相とての中と合点せし是れ
 もも金取歩流きよとつと子大肌脱よりつて掴とつらん勢な
 きい取戻大い怒りけ兼る路とらきよの川越流つたにさきの令
 とつと事帰る奴系政府の役不介とつと吟味せんといふ
 かと嘲笑い徳成り又へ川を流して後たやうの相とての中と合点せし是れ

うらうらうらうら者きんおとて買流とえつと流しぬもよつるまのよき
 声し川越流つたにさきの令
 房今ハたよりりの腰刀抜よりつとさきの川越が肩回とつと
 切付とていさきよと切とつとさきよとつとさきよとつとさきよとつと
 とも馳付致し人進んきよと事とつとさきよとつとさきよとつとさきよとつと
 四人切倒し十人年よも紙負せ冷方うけさし川越流つたに
 べし川を流しつれよとつとさきよとつとさきよとつとさきよとつと
 さらよ公斗ハもさきよとつとさきよとつとさきよとつとさきよとつと
 取と其意紙つやうとつとさきよとつとさきよとつとさきよとつと
 縄よとつとさきよとつとさきよとつとさきよとつとさきよとつと
 押添後九郎事り取戻とつとさきよとつとさきよとつとさきよとつと

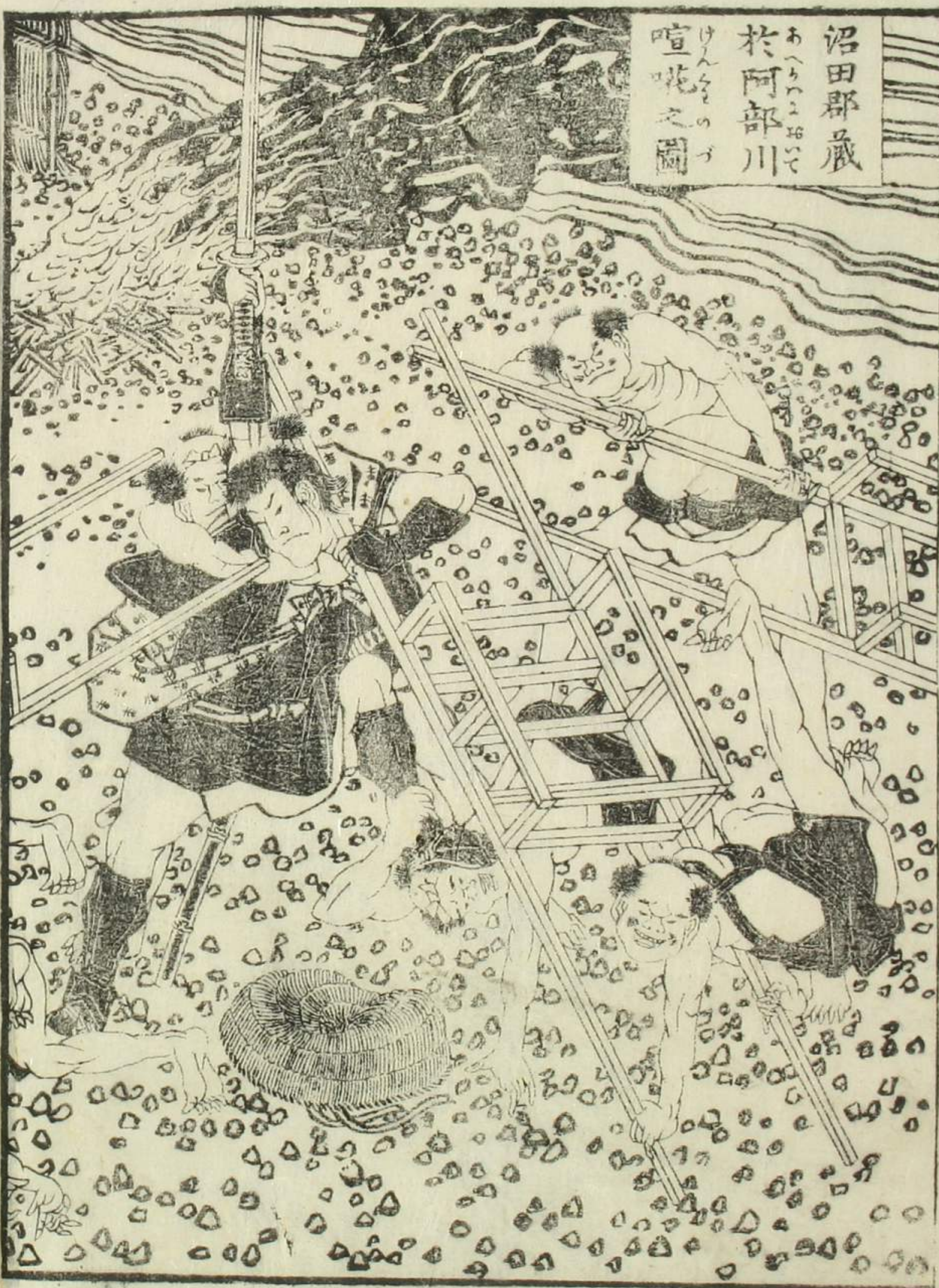
急用有り来る不ろくろくの次平川頼賢も今よと後よりい
 之は法外の有申暮且傷より及くと落もろくろく及九所まで
 志ろくろくは平川内方(書状と事ろくろく)其ろくろくは年中
 一とせいのまゆとろくろくは金が一両小入並書状と事せよ東城
 中(事ろくろく)信内事とて扱ひ大隈布持事世
 ろくろくと物もろくろく敢孫助の店屋方(事ろくろく)一列ろ
 情との扱子細と事ろくろくは頼平川頼も狼籍ゆへに
 扱目傷より及ひ西野の一件と持事火公せよ短急の取
 方とろくろくつづいてのろくろくは信内事ろくろくは下の誤小
 らは全平川頼も理をろくろくは頼人と歳一積とむろくろく
 一とせいのまゆとろくろくは頼平川頼と中(事ろくろく)達と事ろくろくは

一とせいのまゆとろくろくは頼平川頼と中(事ろくろく)達と事ろくろくは
 ろくろくと物もろくろく敢孫助の店屋方(事ろくろく)一列ろ
 情との扱子細と事ろくろくは頼平川頼も狼籍ゆへに
 扱目傷より及ひ西野の一件と持事火公せよ短急の取
 方とろくろくつづいてのろくろくは信内事ろくろくは下の誤小
 らは全平川頼も理をろくろくは頼人と歳一積とむろくろく
 一とせいのまゆとろくろくは頼平川頼と中(事ろくろく)達と事ろくろくは

岡村信内瘧疾と頼平法



沼田郡蔵
於阿部川
喧嘩之圖



沼田郡蔵
於阿部川
喧嘩之圖

まわつて今川家より將軍（大浣布と執上らまの）
 小悦びあひせん代より園侍（一）
 水滸（是ありと將軍家の水吹等より）
 りり五石ふしどるりる是も傳内が
 出入りる小悦日傳内廬疾と
 病一此事より一が同日るまの少一
 とるりる程花いつらくせん奉甲別よ
 いる妻ありしがいつるり一や只今
 まさり富家中ゆもままらるる
 こいと顔てつるは傳内等といさ

抱く思便とて後其子細の兼
 右のつらさ病氣も中歩りる
 傳内次をのふ不とあり一山路
 中よ兼も逢方よ善志はら山
 此不よりんやあく歩りといさ
 病等のものとなすよ兼す身
 めふこそ恨一色甲別よおはさ
 又つらわまが若くけり眼
 自らよ兼もそそつらふ候令
 も是兼より一のせん是ひま
 教さんふまう一悪念き

とくけく女心めこころを免ゆるやせんと思おもふ斗たうこそ所ところの事こと火傳内かでんない
 ののよも中ちゆうさきば胸むねとつていひと物語ものがたりをいひて致いたすおあひはら
 のの業わざと救すくせしまはいとむ易やすするよの業傳内殿わざでんないだんの火傳かでん
 更さらふ心こころをさへ其その元もとをばをも外ほかうへにおんはら其その金かね子こを
 批ぢ者しやの心こころを指さすへと心こころを痛いたむる入いると公易こうやすを合あはせしめ
 へ両りやう手て紙し合あはせ糸いとを心こころに思おもはせ忘わすれしめまじり文ぶん一いつ段だんの信しん
 卜うらふとと流ながるゝ礼らい謝しやとらに致いたすを河か紙し正ただし時とき後ご日にち
 へ急いそぎ合あはせ持もち来きて心こころを貸かすへと親おや心こころへ心こころをききて公こう池いけ
 とつていひてさきとく

致いたすおあひはら其その元もとをばをも外ほかうへにおんはら其その金かね子こを

活田致花かつたぢはなは宿しゆく不ふよゆりおつて心こころを底そこと押おす令しん今いまも調てうをさして

岡村方おかむらたかた来きるよ章ちやうの御ごり昔むかしもいひ奥おくへ入いり昨日けふの事ことの令しん子こ細こ
 進しんつて紙し紙しの親おや元もとをばと心こころをさしてと心こころを貸かすへと親おや心こころへ心こころをききて公こう池いけ
 らも難がた有ある心こころ志しと心こころをさしてと心こころを貸かすへと親おや心こころへ心こころをききて公こう池いけ
 と賣う代だいりして心こころをさしてと心こころを貸かすへと親おや心こころへ心こころをききて公こう池いけ
 た思おもひの心こころをさして今いまも心こころを底そこと押おす令しん今いまも調てうをさして



多きとて小も毎方奥へ入り吐居るまわりの容姿もさる少
 ぶ家よつとまらうと容態もさるんと心をなするに容姿いたすの心
 らるる遠き思もせんきまの床はとも立入るを易いなる
 一滅や人の口のさうさうと物とて正位下女或とて此の折ら
 手茶の心通致を扱との心会はりて今まらるに借列して
 此れは心易ゆと茶系自年が下女と此の折ら
 とやらんといさくとは沙法りりるを友たあま出に能
 る年又より日良意の仇思ひまらせんといけり一昨日途
 中より傳内より合ふまといわく此の折ら
 のりと野道へはいし小声ゆか其え扱との竹馬同茶の心思を
 らるにねる心入るもさるるさうと由り此の折ら
 一昨日途

致花事何とやらん心内家と決らるやうにえ沙法りりる中
 なやりのりりるまらるねり下も人の口まらるまらるさるぬとや
 一入りの入りの妻とねり火のまらるやうに此の折ら
 と何れもい言ふに傳内園てはりりるねり思ひ
 志しぬ花事さる志し致花事甲列分の傍事申したるなり
 志しる者もいりりるまらる人の難漢してはる心易うさる
 一白を合ぬ扱扱るまらるまらるの持たうとさるに列せゆり
 らるるまらるも傳内女たあらうやせり河公ようらるに折ら
 らんと心よ折らねり志すぬ折らて居りりる實や古語に
 も何れも履き入るとりや致花の家分の上評判らる事ゆら
 一も志るに益敷とさる立入る心とさるに傳内地折

のよし女房まほほろどか打ねておぼろおぼろ傳内から
ゆいが奥よて此の声まほほ誰あんと耳とそごまほほ居
くらよ私女房二人の声うろ胸よ一お育ゆ人皆く居居
ふよ女房トうらひねく其作らくの心志一志ごご日外大難
のおろ今まふまごてぬう下され今一其心思ハ忘不し何事
つしぬるをやらんと心そくたぬくの度少くは任せん今か
しぬまらたさるべいとあらくとやそれ私女房あてそく
おごごまほほまほほまほほまほほまほほまほほまほほ
ぬ用まらるるか中し一羽文附まほほまほほまほほまほほ
ゆりのととまらやうよ味とまほほまほほまほほまほほ
やうまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまらまら

ううは婦婦踏まほほまほほまほほまほほまほほまほほ
まほほ今一懸控とまほほ一其上の事と何なるまほほまほほ
私女へ入ば私女かたよりまほほまほほまほほまほほまほほ
守へまらぬ地まほほ私りうりと奥まほほまほほまほほまほほ
や思ひ内よりまほほまほほまほほまほほまほほまほほ
まほほ換振もまほほまほほまほほまほほまほほまほほ
まほほんと推察してゆりまほほ
傳内妻以殺害私女傳内と討てまほほ退治
まほほ傳内情思へまほほ私女妻と密通まほほお遠る一と行
思まほほゆらまほほ今まほほ私女胸まほほまほほまほほ
ゆひ科のまほほまほほ胸まほほまほほ一表まほほまほほまほほ

不座しやと云んたしつる母やと云ふ能とらけ怒れ
 女房發るさこの思ひけり事と云ふりのまを後斗も此
 方よきて出され目紙捺やと云ふ何者さうしつるや
 せー実吾と乳しつるさば家守まごつ日以下血ぬ事と云
 まふといふせもまばらつるつるつるを怪る色料の汝心小同
 卒一貫を悟せしつるつるつるつる振打小肩先一切のんキり
 さらし叫びて逃げんとする様側の脇に切餅一再し打ち
 かつ終つるつるつるつるつる此強勁のおふし雨強く降るれは
 家内よ知との更なる一傳内の血押し挿したらぬ折少そ
 勝手へ出下人と呼ばれ方へ系り急し此目よりつるつるつる
 こまき者居る今出下ささつるつるつるつるつるつるつるつる

侍つりお産つるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 まてお中ふ呼ぶつるつるつるつるつるつるつるつるつるつる
 とつり女房が死骸椽側より引かすは引かすは引かすは引かすは
 眼よぬてつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつる
 とまらふと云ふつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつる
 不道の振返るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
 おおつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつる
 竟女乳心よまらふつるつるつるつるつるつるつるつるつるつる
 りつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつる
 の振舞汝此嬉婦と容通し今更なるつるつるつるつるつるつる
 捺し事つるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつるつる



傳内先
妻の死
後妻
を救
郡蔵を
討んと
却て討
つ

今なきゆりうのまはつたまも今もて冷やう去さるゆの
 不承の悪名付くまはつたまは是とさうと撮合せたのまはつた
 一う血まゝ練の汗田が打たれど交換し頼とさうと切付ら
 まはつた血しねと眼をまはつたまはつたまはつたまはつた
 志の先づかゝる切切のまはつたまはつたまはつたまはつた
 まはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 うる声ゆりてまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 借てまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 者そ其とまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 程程又曰汝尚夏傳内よ舟し紙名紙よりまはつたまはつた
 小舟びまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた

てまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 の陰火とまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 してゆりまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 と見へまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 き妻女と殺害せし本死其の業とまはつたまはつたまはつた
 と鬼のまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 公静し身括ひして床の間の硯引まはつたまはつたまはつた
 一志まはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 とまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 るゆりまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 るまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 るまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 るまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた
 るまはつたまはつたまはつたまはつたまはつたまはつた

と云々同人見らるる

一私養所厚恩と以て伊家へ名を出候へば名立こそお
取有仕合と云々然れども不同村は内事と云々
妻子と殺害一私に密通し切ると候へば
ゆゑも理ふ處少く向ひは火事と云々此傳内と封文
立退一奉と云々今伊家の家と封一血恨を申せ
何ふ定む候へば取替は下り候へ

月日

江田親義

伊波人中様

おのしより 貴子 遣り候へば 火事内味せし一火事と云々
おのしより 貴子 遣り候へば 火事内味せし一火事と云々

尚ほ親類もらうと云へば死骸をく付妻の系争と申候へば
是へ引くりたる取替するの武士のむと申候へば
あり急げと云々と候へば一仕立中候と云々
さきども縁者ともらうと云へば取替するも尚ほ争の事
て詮をもろく死換するも云々
内中同と云々と候へば一主人と大切と云々
傳内証と云々と候へば一此のいふ事と云々
さきども中間風情いんとも云々と申候へば
さきども古々いふ事と云々と申候へば
おえんが母と云々と申候へば一仙指が宅と云々と申候へば
生者必滅る世の智と云々と申候へば一後家娘の岸和田と云々と申候へば

うへ引りりも老後夫のくく二年乃疊年月と送るる
 一後家おととふ年頼ひ付今いもきそのくわくくこれに
 去時取在る娘おそん目々おく者病のくくも其志
 るく二十五六と一期く一終よとくくくしふおそんが
 終くやうくくく天よわくぐれ地よ干してせ行うけまは仙哲
 もそまより病身付くくくよ重伝来り三甲の頼ひ一が
 七十余歳よふ浮世のゆめめくくくおそんいりくおつ
 こ不幸おらひぬまは病命とらけくくもに死んくその
 くらりくくく一と取なきくくくくくくくくく一序
 乃煙りとくく念以又弟い岸和向と引りりくく海
 りくくく取在るおそん一聲とくくくくく教訓とくくくおそん大

一怒り其方男ふくしてわが言甲斐るくくくくくく
 未練乃心をりのくも其方敵討の事成動むくくお却て
 女よねくくく一ふうふと中く一思いとくく風情はし
 取在るも道程よくくくくくくくくくくくくく
 此家の事のとくゆりひ其恨むくくくくくくく
 らいゆ一もふく思ひまきく何圖くくくもぬもくく
 雲の果まて欲の有家冷を仕くんと一変してそれより
 家財宝物田畑を残り正覚院とくく止ね寺へ移け地を
 名より好先志きぬ長くくくくくくくくくくく
 西園順礼のまきくくく一先播列へ立越はくくく
 志まこまへ取在る中くく京都に紫花乃地をきく此不は歌落

居るも平ぐく幸らるる仙哲杖御子格本陸庵と申す
 今出川に居らるる一々通路も折れぬもるれ
 とくく一京朝に運多らぬと申す
 のりり子系格本陸庵よりぐり
 るよたよ勢もおえんも呼入女房も引合おくももる
 餐之無一其救陸庵仙哲乃る恩より一車どもこの路
 此上のゆをさういつとも此方と運届あうて
 へて女房諸ともおくもさうと申す
 大上候に取れあも力と申す
 是中より願ひ多きハ安んして洛中洛外古跡一見ハはけさ
 して取れあ諸とも日く取らるる

おえん 宅宗系伯実母と巡り
 去むと一兩人を月夜洛中と選り
 うらもさうくく九月廿日宅宗系陸庵と子
 清滝乃茶屋よやとくく山して秋討の取事
 向らよおえん持病此癩を治す
 ぐ女抱くも一候候乃釈迦堂の
 一今ハ一足もらむも叶ひは候
 指の者るる持病一申す
 不汲ぬく一あもとつひ入
 尼と公をさしたくも取れ
 湯とらう一色の葉紙りら

用い久しや小びえん殊の外ははれ業服周（この）保養とる内は
 目も言方ふるり（この）定めて陸彦光乃業しらすし
 小ても後伴いん（この）一尼若て此不ハ限居禪同（この）の事合少て中々
 とんきりのやう（この）由宿も由業し（この）の女中此方ノ宿事らせ
 一きまう其えと後（この）由帰いて明教近いの人ハ誠（この）のえらるるごとく
 此きいふぬや（この）今も頼りき何る色ハ小びえんハ保（この）しとて此事
 一宿るさく（この）某と之帰り陸彦老ハ此（この）中ハ明教近いハ事ハ
 小びえんハ保（この）今身ハさう（この）此ハ女中（この）し（この）其方ハ陸彦老ハ
 條じ（この）明教近いハ来及（この）し（この）今ハ教を（この）もん（この）此ハ尼ハ能
 頼を（この）今出川（この）てえらる

再因高臺梅卷之二終

ウエブストル スヘルリング	獨學 一冊	日本 書記	神代卷 小本二冊
サレセント氏 第リードル	獨學 一冊	加藤馬文光 <small>（この）</small> 著	地方大概集 日初編至四 編各五冊完 彩色ハ
宮田先生著 皇朝戦畧編	八冊	近藤先生著	金銀圖録 全七冊
学校専用改点 小學素讀本	二冊	英學之部 折本	横文字獨替古 書冊
森先生著 洋算学を免		一名西洋美術早 <small>（この）</small> 言	全冊
發兌書肆	大阪心齋橋橋元 北久寶寺町南入	前川源七郎梓	

右ノ書籍ハ
 大阪心齋橋橋元
 北久寶寺町南入
 前川源七郎梓

